

新型うつのパersonality特性への対人経験の影響

21006FRM 鬼頭 利弥

キーワード：新型うつ・対人経験・personality特性

I. 問題と目的

新型うつとは従来のうつの定義にあてはまらない「うつ」を総称したものであり、「ゴツ煮」（生田, 2014; 辻, 2015）と呼ばれ、質的に異なるものも同じ「新型うつ」と一括りにして呼んでいるという問題がある。そのため、新型うつへの支援を考える際には、新型うつ内の要素の質的な違いを考慮する必要がある。

辻 (2015) は、新型うつは、個人要因による環境適応の不全によるものであり、その個人要因の違いから新型うつ内の質的な違いを整理することができるとしている。そして、そのpersonality特性について、1.他責・自己中心的、2.自己愛傾向、3.自尊感情、4.拒絶過敏性（対人過敏性）の四つに分類した。本研究では、辻 (2015) の考えを基に、新型うつの背景にある4つのpersonality特性に対する抑制・促進要因を考えた。

小花和(2004)によれば、後天的に獲得できるレジリエンスのひとつに過去経験がある。このことから、4つのpersonality特性に対する抑制要因として、過去の対人経験を検討した。

本研究では、新型うつとなる人が持つとされる4つのpersonality特性を基に、対人経験との関連性を調べ、どの対人経験が、どのpersonality特性を抑制、あるいは促進するのかを明らかにした。また、それを踏まえた上で、現在の抑うつ症状にどのような影響を与えているのかを検討することを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象者・実施場所・日時

2022年10月5日、A大学の大学生83名に対して、大学の講義時間内において質問紙による調査を対面で行った。

2. 手続き

大学の講義時間を借りて一斉に配布し、集団法で実施した。調査対象者に調査協力への同意書と調査目的と注意事項を表紙につけた質問紙を配布し、同意を得たうえで実施した。所要時間は約15分だった。また、回答は全て無記名で行った。

3. 質問項目

質問紙の質問の内容は以下の通りであった。

- 1) 抑うつ尺度：PHQ-9日本語版（重症度評価版2013）9項目を用いて4件法で回答を求めた。
- 2) 対人経験尺度：天貝（2001）の信頼感影響経験尺度のうち、承認経験6項目、受容経験4項目、対人的傷つき経験5項目を使用し、対象問わず計15項目を4件法で回答を求めた。
- 3) 自己愛傾向尺度：中山・中谷（2006）の評価過敏性-誇大性自己愛尺度18項目を用いて5件法で回答を求めた。
- 4) 拒絶過敏性・自己中心尺度：村上・山川・坂本（2017）の対人過敏・自己優先尺度25項目を用いて5件法で回答を求めた。
- 5) 自尊感情尺度：ローゼンバーグ自尊感情尺度を桜井（2000）が邦訳した10項目を用いて4件法で回答を求めた。
- 6) フェイスシート：年齢、性別を尋ねた。

III. 結果

抑うつについて、Kroenke, Spitzer, & Williams (2001), 村松(2021)を参考に0点から4点を非抑うつ群、5点から9点を低抑うつ群、10点以上を高抑うつ群とした。その後、抑うつ群を独立変数、personality特性を従属変数とした一元配置分散分析を行った。

本研究では、5つのpersonality特性のうち「評価過敏性自己愛」「衆目過敏性」「自己中心性」

において、非抑うつ群よりも高・低抑うつ群の方が、パーソナリティ特性の得点が高かったことが明らかとなった。「誇大性自己愛」については非・低抑うつ群よりも、高抑うつ群の方が、パーソナリティ特性の得点が高かった。また、高抑うつ群よりも低抑うつ群、低抑うつ群よりも非抑うつ群の方が、「自尊感情」の得点が高かった。

その後、対人経験、パーソナリティ特性、抑うつ症状の全9変数による、共分散構造分析を用いてパス図を作成した(図1)。

IV. 考察

1. パーソナリティ特性の影響のパターン

「衆目過敏性」「自己中心性」「評価過敏性自己愛」「誇大性自己愛」で、病理群と健常群を分けるカットオフ値では差は現れず、より低い得点の間で差が現れた。このことから、抑うつ症状に影響を与えるパーソナリティ特性には、「自尊感情」などの直接抑うつ症状の程度に働きかける特性と、「自己中心性」などの抑うつ症状を呈しやすい特性の2パターンがあることが示唆された。

2. 対人経験から抑うつ症状に至るまで

自己中心性について、廣澤・大西・岸(2018)は、自己完結的で独善的な側面と、情緒的にも認知的にも他者の身になることが難しい側面の二つの要因を持つとしている。つまり、対人傷つき経験が増えることによって、更なる傷つきを避けるために自己完結的な思考になり、情緒的にも認知的にも他者の身になって物事を考えることが難しくなっていくと考えられる。

また、自己中心性は、抑うつ症状、評価過敏性自己愛、自尊感情をそれぞれ強めていることが明らかとなった。自己中心性が直接抑うつに影響すると同時に自尊感情を低下させることで、間接的にも抑うつ症状へ影響を与える。このように対人傷つき経験から抑うつ症状までには自己中心性を経由した直接的・間接的な二つの経路がある。

自尊感情について、集団参与経験が多く社会適応に優れる場合は自尊心が高く、集団参与経験がなくとも自己受容経験があれば自尊心が高く得ることができる。この自尊心の高さが健康的な誇

大自己愛に繋がり、自尊感情に繋がっていると考えられる。

3. 支援

対人傷つき経験から対人関係を避けることが、自己中心性を高めている。また、対人関係を避けるということは、受容経験や集団参与経験を乏しくさせ健全な自己愛や自尊感情がうまく高まらないという事も考えられる。

そのため、対人傷つき経験を経ても人との関わりを断つことなく関係を続けていくことが重要である。従来のうつ病では休息と薬物療法が必要とされるが、新型うつに対しては、対人関係を切らず受容的な関係を構築し、危機や傷つきに立ち向かう心理的支援が必要なのである。

3. 本研究の課題、今後の課題

本研究の課題として、一つに性格から経験への影響を考えていないことが挙げられる。自己愛は失敗経験を回避するとされているように(前, 2018)、経験からパーソナリティへの影響のみではなく、パーソナリティによって経験の程度に影響を与えることも考えられる。そのため、経験と性格の相互作用についても検討する必要がある。

今後の課題として、自己中心性と経験の関連を検討することが挙げられる。自己中心性と経験の相互関係に注目し、抑うつ症状と関連する自己中心性がどのような経験から影響を受け、どのような経験を反芻しやすく、どのような経験を回避し、どの経験からのアプローチが最も自己中心性に影響を与えることができるのかを考えることで、自己中心性というパーソナリティ特性を変容させ、且つ受け入れやすい生活スタイルの提案に繋げることができるだろう。

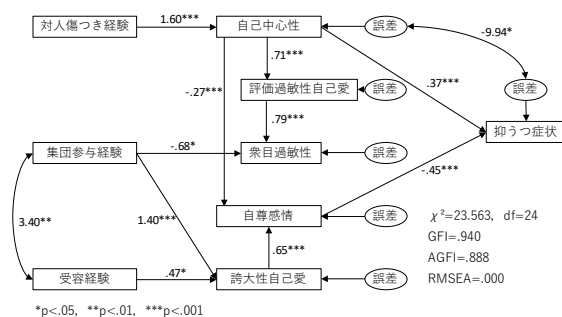


図1 経験・性格・抑うつ症状のパス図